

三重県立上野高等学校
同窓会報

VOL.5

白 HAKUA 亜

事務局：〒518-0873
三重県伊賀市上野丸之内107
上野高等学校内
TEL & FAX：0595-24-2231
ホームページ：
<http://www.ict.ne.jp/~hakua/>
E-mail：hakua@ict.ne.jp



能登 青年の家



野尻湖 カヌー体験



九州



信州 スキー研修

フォト・メモリー ～修学旅行～



北海道

ときめき
ふたたび



姫路城

修学旅行が戦後、上野高校で再開されたのは昭和二十七年のこと、東京方面への四泊五日の旅だった。当時は男女別行動で、往路復路ともに車中泊という記録が残っている。昭和三十一年から行き先が北九州方面となり、帰りに船旅に、昭和三十二年以降は男女一緒にの修学旅行となる。昭和四十年、「動くHR」と呼ばれる新方式がスタート。HR単位で中国・四国コースと北陸コースに分かれて二泊三日のバス旅行となった。昭和四十八年から「国立能登青年の家」を宿舎に利用して、HR単位でバスツアーやスポーツを楽しむ、昭和五十九年からはスキー研修で信州へ。平成十一年は秋の信州・黒姫高原、そして平成十二年からは秋の北海道へ飛行機でひとつ飛びの時代。

この四半世紀、目的地や交通手段はいろいろ変わったが、高校時代にクラスメイトといった修学旅行。その行き先をもう一度訪ねてみる。



同窓会長 左橋佳三

上野高等学校同窓会員の皆様、平素は同窓会の事業運営に對しまして格別のご高配を賜り誠に有難く厚くお礼申し上げます。

さて、本同窓会も既に三万名を超す多くの会員を擁する大きな組織となり大変喜ばしく、またそうした中で、上中、くれば、扇の芝各会、或は、東京、京阪神、名古屋の各支部には同窓会としての事業を活発に推進いただいております。心から感謝申し上げます。

学校創立百周年を契機として、明治校舎の有効活用、同窓会館の拡充、記念庭園の設置、また横光利一大先輩を偲んでの「雪解の集い」、「ふるさと伊賀再発見」と銘打った講演会の開催等、同窓会としてのハード面、ソフト面も年々充実してきております。昭和六十年代以降の卒業生諸君の同窓会のあり方に対する考え方、また同窓会活動への参画そのものが希薄に感じられることが多少残念といったところでもあります。

今後、同窓会の意義の再認識、そして同窓の絆の強化を図るためにも、同窓会に對しましての一層のご協力、ご支援をお願い申し上げます。ご挨拶といたします。

ごあいさつ



学校長 上村桂一

同窓会の皆様には、平素より上野高等学校の教育の振興に格別のご高配を賜り、誠に有難うございます。

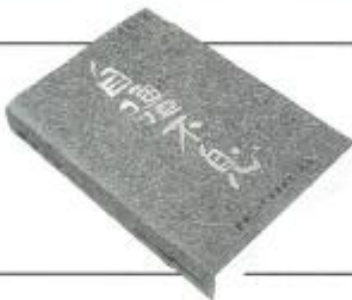
上高生は、皆様から自強不息の精神を受け継いで頑張っています。昨年度も、ギターマンドリン部、吹奏楽部が全国大会で優秀な成績を納め、またサッカー部、硬式野球部が県大会で上高旋風を巻き起こしてくれました。申すまでもなく、学業においても上高生は実力を発揮しており、今春も難関とされる大学に合格実績を伸ばしています。

最近、景気の回復とともに人材確保に向けた動きが社会現象となっており、数年前とは隔世の感があります。しかし、変化の激しい時代にあつて、子供たちに、基礎基本を身につけたうえで、目標の実現に向けて自ら考え行動する力が厳しく求められている状況に、変わりはありません。上高生が、そうした力を養って社会の発展に寄与する人に育つよう、本校教職員は、一丸となって取り組んでいます。

皆様には、本校教育に一層のご支援をお願いいたしますとともに、益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

今秋

名簿発刊



最終調査にご協力を！
ご予約・お申込はお早めに！

アジアから世界市場へ

敏腕プロデューサーが行く

探偵追跡 卒業生 一

一四方を山に囲まれた田舎町。この静かな町の丘の上の住宅地に住む酒井一家。

「家族」「生と死」と向き合い、成長していく主人公の二階に、そっと触れてみてください。

信を起用し話題を集めた人物である。翌年には、崔洋一監督「刑務所の中」製作で第22回藤本賞新人賞受賞。二〇〇四年には同監督「血と骨」製作で、主演にビートたけしを迎え大きな話題を呼んだ。

伊賀を題材に今冬公開される、映画「酒井家のしあわせ」のキャッチフレーズの一部である。

また同社は、伊賀地方ではおなじみの、毎日放送「ちんぷんぷいぷい」や関西テレビ「痛快！エブリデイ」などのテレビ番組の制作・制作協力も行っている。

この「酒井家のしあわせ」を製作しているのが、株式会社ビーワールド代表取締役の若杉正明さん。二〇〇一年に相米慎二監督「風花」で、映画初プロデュースながら小泉今日子・浅野忠

「高校2年生の時、生徒会長に立候補して、信任投票で不信任になったんです。結果、3年生の生徒が暫定的に生徒会を組織しました。

クラブ活動は、軟式庭球部に入ったんですが、数か月で辞めてしまいました。そして、放送部に入部しましたが、2年生の時に顧問からクビにされました。」



高校時代についてこのように語る若杉さんですが、地学の奥山茂美先生や数学の和田憲明先生、現国の清水徹富

先生などが印象に残っているそうです。また、2年生の時の担任であった浜瀬修己先生とは、社会人になってからもお酒を飲みに行くなど付き合いがあったそうです。



今冬12月から全国公開される、伊賀市上野出身の奥山茂美初監督作品。サンダンス・NHK国際映像作家賞二〇〇五受賞。製作は若杉正明。エグゼクティブプロデューサーの一人に岩城正剛(雅名格平・高34回)出演にユースケ・サンタマリア、友近他。昨秋、伊賀地域で全撮影が行われた。

ただ、この業界にはいる原風景がなかったわけでもない。子供の頃からテレビを見るのが好



きだったという。けれども、伊賀には当時映画館がなく、やはり都会出身の人とは経験上の差がある。だからこそ、クリエイターではなく、プロデューサーであると自負している。高校時代に放送部をクビになったのも何かの因縁ではないかと話された。

また、いまの中高生に対して、映画だけでなく、文化・芸術に触れるのがよい。感性が変化してくるし、好むものは何かということを広げていくこと

今後の方向性は、アジア市場から世界市場へと目を向けているのだとい

懐かしの先生をたずねて

世界で一人のケビラゴケの研究者 山田耕作先生

先生は、昭和37年から41年の4年間、上野高校に在職された。当時、学校には黒川喬雄先生の伊賀地方の植物標本が保管されており、この貴重な資料の整理・保管という任務も兼ねていた。自由に資料が見られるということで、二つ返事で上野へやって来た(この標本は今も生物資料室に保管されています)。当時、理科は化学、物理、地学、生物と分野ごとの研究室があり、事務員さんも付いたアカデミックな形をとっていたことにも惹かれたようだ。

先生は、自身の高校時代(宇治山田高校)に山川修吉先生(元上高教員・名張高校校長)の指導を受け生物の世界に目を向け始める。その頃、植賀安平先生(文部大臣より表彰された教育功労者)に会う。植賀先生から「お前はアホか、聞いても書いたらあかん、すぐその場で覚えよ!」とよく叱られたらしいが、しかし、陰では「あのぐらいしつこくないとあかん」と褒めてもいたようだ。「人のやっていないことをやれ」と先生という先生の一言で人生が変わった。

昭和53年、宇治山田高校在職中に学位(理学博士)を修得。研究題目は「アジア産のケビラゴケ属の再検討」。先生が44歳の時である。「ケビラゴケ」の研究は世界中で先生一人だけだそうだ。今も世界中からケビラゴケの標本が届く。鑑定依頼である。



この学位の話には、更に人との出会いが絡んでいる。上高在職の頃、先生は孫福正氏(当時伊勢市小学校教諭)と「伊勢神宮宮城苔類図鑑」を出版。この本が契機となって孫福先生を通じて服部新佐博士(世界的に著名な学者)に会う。服部先生に学位論文を書けと言われた。「とにかく書きなさい、役に立つ時が必ず来るから」としつこく勧められ、その気になったようだが、学位なんて身分不相応だと思っていた。「いい先生ばかりに出会え、その先生方の生き方を受け継いできただけだが、いい教育環境にも恵まれた」とおっしゃる。今も感謝の気持ちでいっぱいだそうです。

先生は、教職時代、授業中教科書やノートを開くことなく授業をしてきたという。植賀先生に言われた「書くな、覚えよ!」の一語を実践してきた。「生徒達に勉強せよ」と言わなかったそうだ。自分が苦勞して勉強した事を一番よく知っているからだ。苦笑しながら、「勉強の苦勞を知らん人ほど勉強せよと言うから面白い」。何事も教えてもらっている間は勉強の内に入らん、自分でやった勉強こそが身に付き財産になるのだと説く。

さて、エピソードを一つ。那須御用邸の動植物調査に加わり調査報告書を書く。平成2年、発刊のお祝いを兼ねて天皇御一家に招かれお会いしていること。

まだまだ話は尽きず書かせていただくことは沢山あるのだが……先生のお宅から、神宮へ案内して下さる時、お孫さんに声をかけられた「さとちゃん、おじいちゃん行ってきます」微笑ましい光景で私たちは送り出された。ああ、これや! たった4年の上高在職なのにいまだに教え子に慕われているのはこれなんだ。この人情深い飾り気のない人柄はとても魅力的だ。ほっこりした気持ちで私も外に出た。(安屋宜子・高19回)

校歌作曲家「信時潔」を想う

「空気感」が大切。「酒井家」は伊賀上野出身の監督で、題材が伊賀上野。いつか伊賀上野で撮りたいと思っていたのが、実現したのだった。目を向けているのは、かつて大ネタだけではなないのである。ただし、キャストینگにはベストでのぞんでいる。

今後の方向性は、アジア市場から世界市場へと目を向けているのだとい

う。今春、韓国ソウル特別市に映画製作会社ビーズ・スターを設立したのも、その思いからである。現在、日韓米英4か国資本で事業を展開している。

また、これまでどちらかというと社会派の映画製作が多かったが、今年には娯楽映画の製作も行っている。

新たな展開に目を離せない、いまとともに行く人である。

構成 増田 雄(高42回)
取材 池澤基善(高19回)
木宮康介(高41回)

初めて校歌を聞いたのは、入学式だったのか、始業式だったのか。もう四十年前も前のことで記憶はさだかでない。歌詞に学校名が入っていないのに驚き、メロディーが行進曲ふうではなく荘重な感じがして、急に大人になったような気がしたのは覚えていた。

校歌の作詞者が山口誓子であることはよく知られている。国語の教科書にも登場する著名な俳人である。しかし、作曲者が信時潔であることを知っている人はあまりいないのではないだろうか。名前には知っていても、どういう人物なのかまで承知している人はさらに少ないだろう。信時は、大友家持の「海行かば 水漬く屍 山行かば 草生す屍 大君の辺にこそ死なぬ 願みはせじ」に曲をつけた「海ゆかば」の作曲者である。それゆえにであろうか、戦後は封印されてしまった感がある。

信時の没後四十年にあたる昨年、私が勤めている都留文科大学の国文学科教授である新保祐司氏が、信時の最初の評伝である「信時潔」を構想社から出版した(一、九〇〇円)。本の内容を紹介する余裕はないが、信時の精神性の高さを讀んでいる。ぜひ一読いただきたい。校歌の作詞者が山口であることを誇りに思うと同じように、作曲が信時であることを誇りに思うはずである。

今年の正月二日に二十一期生の集まりがあり、新保氏の「信時潔」を紹介させてもらった。まずは校歌の作詞者の名を尋ねたところ、即座に方々から

山口誓子の名が返ってきたが、作曲者については、名張高校の教頭をしている皆山善久君から「信時潔」と返ってきただけであった。皆山君はさらに「名張高校の校歌も信時の作曲である。信時作曲の校歌は県内だけでなく、県外にも多い」と教えてくれた。

帰宅してから、思いついてネット検索してみた。「校歌」と「信時潔」を入力してみたところ、「信時潔研究ガイド」というサイトが見つかった。それによると、信時の作曲した校歌は九百以上にのぼる。それらの一覧が掲載されており、もちろん上野高校の校歌も含まれている。驚いたことに、津高校の校歌も山口誓子作詞・信時潔作曲で、一九五二年の制定である。我が校のより二年前になる。二番目であったのを残念に思ったが、続いて津高校のサイトを聞いて校歌を探してみた。津高のサイトでは三番まで聞ける。ちなみに上高のサイトで聞けるのは一番までである。そもそも国歌や校歌などは優劣をつけるものではないが、聞き比べてみたところ、我が校の方が詞も曲も格段に優れているように感じたが、みなさんはどう思われるだろうか。

(西出公之・高21回)



構想社「信時潔」表紙

上野高校近況

はるか昔、大正時代の頃、北海道出身の友人が伊賀の私の家へ遊びに来た時のことです。上野公園を案内していると、「いいなあ。僕は「青春の城下町」を聞いてこのような町にあこがれていたんだ。」と友人が言いました。団塊の世代の私たちにとってはなつかしい歌謡曲の題名ではないでしょうか。

その上野公園の高い石垣から南を見下ろした風景が画面に映し出されました。芸術棟2階の窓から生徒たちが手を振っているではありませんか。今年4月9日曜日のことです。ごらんになった方も多いと思います。が、NHK衛星第2「おひい日本、私の・好きな・三重県」で伊賀市からも中継放送がありました。次の画面には明治校舎正面、そして天井が高い廊下へとカメラは入っていきました。久しく本校へおいでになっていない方にとって、変わらぬところにあるのはやはりこの明治校舎でしょう。長い年月を経ても丈夫でどっしりとした校舎。私の高校時代には美術室や生徒指導室があって、あの長い廊下を急いで走っている時も、生徒指導室前では足音をひそめたものでした。

「ささやまのこと思い出さねえかな」と芭蕉さんは詠みましたが、卒業後は様々な場で、また色々な事に触れた時にふと上野高校時代を思い出すことがありました。春には学校周辺の桜の古木、花吹雪となって堀の水を覆う様。現在の生徒の心には、毎日の学校生活でどのようなことがこれから長年の間残っていくのだからかと思えます。全国にテレビ中継放送された時に明治校舎で部活動をしていたことでしょうか。こんなところにとりまわると淡いピンクの花水木を発見したことでしょうか。今、3年生のクラスでは卒業アルバムに写真撮影場所を考えています。正門前やお城をバックに、思い出作りの相談に、3年生は早将来の目指すところが近づいてきたことを感じていることでしょうか。

平成16年度(平成16年9月1日-平成17年8月31日)三重県立上野高等学校同窓会名簿特別会計収支決算書

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 決算額, 対予算比. Includes sections for 1. 収入の部 and 2. 支出の部.

平成17年度(平成17年9月1日-平成18年8月31日)三重県立上野高等学校同窓会名簿特別会計収支決算書

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 決算額, 対予算比. Includes sections for 1. 収入の部 and 2. 支出の部.

平成18年度(平成18年9月1日-平成19年8月31日)三重県立上野高等学校同窓会一般会計収支決算書

Table with 4 columns: 科目, 予算額, 決算額, 対予算比. Includes sections for 1. 収入の部 and 2. 支出の部.

平成17年度(平成17年9月1日-平成18年8月31日)三重県立上野高等学校同窓会一般会計収支決算書

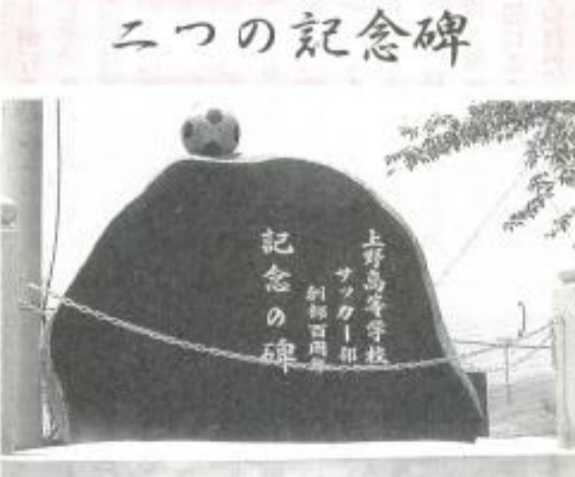
Table with 4 columns: 科目, 本年予算額, 前年度予算額, 前年度決算額, 対前年度予算比, 対前年度決算比. Includes sections for 1. 収入の部 and 2. 支出の部.

会費納入のお願い

当同窓会は、毎年春の卒業生による新入会員入会金と全会員にお願いしております年会費の合計で運営されています。ご承知の通り、非常に活発な同窓会活動を行っており、この1年間の主な事業を挙げますと次の通りです。
・同窓会報「白亜」の発行
・ホームページの運営
・一般公開講座(明治校舎で学ぶ)「ふるさと伊賀 再発見パート8」
・「雪解の集い」の後援
・百周年記念施設の維持管理
・東京、名古屋、京阪神支部への支援
・上中会、くれは会、扇の芝会への支援
・各学年同窓会への支援
・上野高校への支援
その他、総会の拡充や会員名簿の管理等行っております。昨年度分としてご協力いただいた方々は、5月7日現在2,818名で5,636,000円のご支援を賜りました。今年度も年会費(一口2,000円)の納入につきまして、会員皆さま方のご協力、ご支援をよろしくお願い致します。



くれは部記念モニュメントが設置される
くれは部は、上野高等学校の前身の旧制河山高等女学校同窓会の組織で、上野高等学校の中庭には、戦前に作られた筆塚と針供養塔が設置されており、榊子松の木が植えられていました。今回、榊子松の木が枯れてしまったため、代わりに永久に残せるよう石材で、記念モニュメントが設置されました。在校生にとっては、本校の伝統を尊重し、厳しい社会状況の中でお、数字に助んだ先輩の努力を受け継いでいることを日々確認するためのモニュメントとして生かしてほしいとのことでした。



サッカー部創部百周年記念碑建立
本校サッカー部が、前身の上中以来数々の優秀な戦績を納め全国に「上中」「上高」の名を高めました。この度CB会では、創部百周年の実績を記念すべく左記のような記念碑を第二グラウンド入り口に建立しました。今後のサッカー部の活躍はもとより、母校の体育系クラブの励みの糧となれる事を念願するものです。又、記念祭にはOB約150名が集い、ゲームに汗流し、懇親会では思い出話の楽しい一時を過ごすことができました。(サッカー部OB会事務局)

総会報告

平成17年度の総会は昨年10月8日に上野フレックスホテルにおいて開催されました。前月に行われた役員会・理事会の議案が審議承認されました。総会事項は次の通りです。
◆日時 平成17年10月8日(土) 14:00~17:00
◆挨拶 星周輔会長 上村桂一学校長
◆来賓 吉岡 進東京支部支部長 山本吉正名古屋支部支部長 松井昭京阪支部支部長
◆議事 平成16年度事業報告 平成16年度一般会計及び特別会計の決算・監査報告 平成17年度事業計画 平成17年度一般会計及び特別会計予算案
平成16年度会計決算と平成17年度会計予算は上段の通りです。



役員改選では、星周輔会長が顧問になられ、左橋佳三副会長が新会長に選出されました。総会に続いて記念講演会が行われました。
◆演題 「人間と笑い~笑いの力」
◆講師 井上 宏さん(関西大学名誉教授)
◆内容 急速に変化を遂げる現代社会は、私たちにさまざまなストレスを強いる。環境や仕事の急変、熾烈な競争、複雑化する人間関係など、中でも人間関係のこじれや崩壊は、心を痛く悩ませる。人間関係にとってコミュニケーションが大事だが、仲良くなれるコミュニケーションとはどんなコミュニケーションなのか。笑顔から始まって、互いが笑いあって笑いの感情を共有し合うことが大切だ。個人の権利の主張、個人の欲望の肥大と個人優先が叫ばれるが、その個人も仲間、共同体との仲の良い関係なしには生きてはいけないのである。人間が個体として元気に生きるためにも、仲間と仲良く生きるためにも笑いが欠かせない。「笑いの力」については、まだまだ解明されていないことが多いのであるが、笑いが人間の心身に与える影響と同時に平和な社会生活を営む上でも重要な営みであるということについて語っていただきました。(福井 亨・高25回)

平成18年度(2006年)同窓会総会
とき 平成18年10月14日(土)
・14:00~ 総会 ・15:00~ 記念講演会
・16:00~ 懇親会
ところ 上野フレックスホテル
三重県伊賀市平野中川原544-2
記念講演
講師 福井 健二さん
演題 上野城と藤堂高虎
プロフィール
昭和12年2月16日生 69歳(上高6)
現在、伊賀文化産業会(上野城)専務理事・上野高校評議員。在学中に講堂裏にある上野城石垣に興味を持ち上野城の研究に入る。著書に「上野城郭図集」・「三重の城」・「上野城と城下町」編著に「伊賀の中世城館」・「城館調査の記録」など多数がある。昭和50年三重県教育委員会より「三重県文化奨励賞」を、平成5年「三銀ふるさと三重文化賞」を受賞している。
平成18年度の総会・講演会・懇親会を上記の通り開催します。お誘い合わせの上、多数ご出席下さいますようよろしくお願いいたします。受付は当日会場で行いますので、自由にご参加下さい。懇親会参加者には、ささやかなプレゼントをご用意いたします。(協賛学年...上高6回)

おたより おしらせ

上中会発足15年目を迎えて

戦後新制の上野高校同窓会が発足されましたが、今から15年前上中会初代会長林栄一氏(29回卒)始め有志の方々が集まり、「ぜひ、上中卒業生の閉結を図り学校の歴史にその足跡を残して行きたい」との強い要望で平成4年6月に、上中時代を過ごして来られた全国の卒業生に呼びかけ新たに上中会を結成、発足しました。全卒業生は第1回より46回卒まで約4,200人と書かれていますが因に現在の会員数は約1,400人です。この会の事業活動につきましても、各卒業回毎に2、3名の幹事さんの選出をお願いして、各回幹事さんが、世話役となって会員の消息を確認し合い、会員の結束を図って来ました。事業として毎年1回の報告事項、会員相互の近況や情報を伝えるため「上中会だより」の編集発行を行い会員全員に送付しています。また毎年6月の総会日には多数の会員の出席のもと、総会(事業報告、会計報告他)、記念講演会(会員有識者の講師をお招きして講演会)と懇親会(会食と興味のあるアトラクション等)で会を盛りあげてきました。また10周年記念事業として上中(大型)校章模様の製作除幕、上高吹奏楽部の友情演奏をお願いしました。

副会長長谷優徳氏、上高校長上村桂一氏、上高教頭杉生彰氏のご来賓からは丁寧なご祝辞をいただきました。第三部、記念講演会は講師に大阪大学名誉教授で福井工業大学電気・電子学科教授、工学博士白藤純嗣氏(49回)の「半導体とその応用について」の演題で講演を拝聴しました。現在我々が家庭や戸外で簡単に使っている機械器具の殆ど全てに半導体が使われている事が分かり今更ながら驚きました。第四部、懇親会では各回卒業生が一堂に会し盛大に開催されました。お互いに近況を語り、上中時代の思い出に花を咲かせ時の経つのも忘れ楽しい一時を過ごしました。会の締めくくりとして、上中校歌を声高らかに合唱し有意義な一日を無事終えました。「また来年元気で会いましょう」を合い言葉に三々五々会場を後にしました。現在の会員の皆様は戦前、戦中、戦後、の波乱万丈の世代を上中校訓「自强不息」の精神のもと強く生き抜いてこられた方達ばかりだと思います。我が上中会員も一番若い最終回生で早や70歳(古希)を越え、年々会員数が減りつつあるのが少し寂しく残念に思っています。

(上中会副会長 佐賀薫 中45回)



二十年会の集い

7月16日サンピア伊賀にて、二十年会の集いを致しました。卒業は終戦の年昭和20年3月、工場動員より直接学校に戻り卒業式に臨み「海ゆかば」と校歌を斉唱して又工場にとりて返りました。それから六十年、皆様御元気で集い、学生時代に戻った様で剣舞、カラオケと楽しみあと故郷藤先生におそわった「平城山」を全員で唱って思い出に浸り、校歌を斉唱して締めくくりました。

又来年も健康でお目もじ出来る事を念じつつお別れ致しました。

(松本ふみ恵)



白鳳20(上高3回)

6月8日、男性30名、女性36名がメナード青山に集まった。私たちは、昭和20年に旧制の中学校・女学校に入学した仲間、学生時代に修学旅行の経験がなく、昭和56年に卒業30周年を記念して、自前の旅行を実施、以来、隔年(最近毎年)に集いを重ね、今回は第14回目であった。平均して80名が集まってきた。今回も、余興やカラオケが楽しみ、夜遅くまで、ワイワイガヤガヤと賑やかに旧交を暖めてあった。古希も過ぎ、最近幽明界を異にする仲間が増え始め、淋しさが募るが、お互いに健康に留意して、来年京阪神地区での集いを約束して別れた。

(杉森英夫)

上九会 (上野高校第9回生同年会)

2005年9月10日、11日 やや秋めいてきた9月10日、伊賀当番会を赤目滝で開催しました。「瀧本屋」さんで宴会、宿泊。翌日は滝に登りました。85名の大移動でした。佐々木龍宝先生、福井正和先生、岩本建先生、百南久子先生がご出席くださいました。毎回ご出席くださる先生方のうちの福井先生と私(ケ・ケ)とのお話の一部でこの会を紹介させていただきます。

ケ「先生、お変わりなくとも嬉しいです。ところで先生失礼ですけどおいくつに？」

F「何言うてんの、あんたより10歳上やわサ」

ケ「へーじゃ75歳？ 昔の先生とちつとも変わられてないから。じゃ上野高校には何年？」

F「4年間やけど初めての学校やろ、ボクの青春やわサ。この春、友人夫婦と4人で月ヶ瀬梅林へ行ってサ。マラソンのこと思い出してたよ」

ケ「私は先生にお会いできるのがこの会に来る楽しみの一つですが、先生にとってこの会は何？」

F「長谷君やほかの皆に逢うことは勿論やけど、もうひとつ、この伊賀っという所の空気がボクの青春やから、毎回楽しみにしてるよ」

翌日先生は、途中休憩するわれわれ仲間、最後の百畳岩まで歩かれました。

心地よい水の音や、しつとりと迎えてくれたミズヒキ、百畳岩ではオオサンショウウオの出向かいも受け、あらためて郷里のよさにふれた会でもありました。



上野高等学校 昭和39年 (第15回) 卒業生

本年還暦を迎えるに当り還暦同窓会と銘打ち開催しました。遠くは千葉県、埼玉県からも参加していただき、42年振りの再会の人もあり、感動的な出会いがもてました。開会の挨拶から乾杯に入っ



その後63名全員で記念撮影(同封)、開会後は食事もそのけで懐かしい友との語らいが延々3時間あまりも続き散会しましたが、別れを惜しむ40名近くの者が二次会、三次会をもち夜の更けるまで語り合いました。

同窓会終了後は記念の写真及び連絡を取り合う為の住所録を送付致しました。

(同窓会幹事 西森平之)

上野中学校第46期生 記憶調査の集計報告

46期のクラス会「46会」は、今年も約束どおり、4月6日に開かれた。奇しくも、この日は(城(シロ)の日)に当たって、今年、伊賀上野城が全国百名城に認定された日。クラス会には、その天守閣をバックに集合写真を撮った後、会場のヨコエホテルに37名が出席して、宴会であった。

クラスメートのうち、早々と鬼籍に入った54名一人一人を偲んで黙祷し、今年の代表幹事、福井佑吉君が開会の挨拶をした。早速、大田君が「植物の季節と私の生活」という演題で、クラス会恒例の30分講演をした。南北に長い日本の中でも、伊賀地方は植物分布の豊かな緯度に位置する土地。この地を、生涯の研究フィールドに決められた恩師黒川先生の心眼にも迫る、「歴史的な講演」であった。ちなみに大田君は「ワシヤの愛弟子」を誇りにして、現在も日本生態学会の会員。故郷の露生で百姓三昧を楽しんでいる。

さて、以下に、ご報告するのは、当日37名の出席者に問うた「在学5年間の記憶調査票」の集計結果である。(この「イタズラ調査」は小生の個人責任で協力をお願いしたもので、無礼・不躰の誹責は全て小生が負うものである。)

調査の設問は「現在、貴君の記憶に残っている、在学中の恩師のご尊名を列記せよ。併せて、ニック・ネームも。どちらか片方でも、両方でもよい。」である。

調査票の回収率は、37分の31であった。

集計の結果、46期生の頭(ときにはピンタ)に叩き込まれてある恩師のご尊名は次の通りであることが判明した。(以下尊称は省略させて頂く)

筒井30、川口26、渡辺24、柳田22、花守21、辻井20、黒川17、伊藤14、吉森12、山田11、(以下)鈴木、佐々木、楠原、福井、清水、斎木、橋本、小松、村田、十河、梅田、竹内、山田(英)、大長、福岡、樋口、松村、岩野、正住、釜井、西岡、

ビンちゃん30、オカイ28、マツちゃん23、メダカ23、ダボちゃん20、チリ17、ワシヤ17、チヨセ(挑戦)14、ピ1サン12、コーボー12、

(以下)カンタロー、サンちゃん、ジ1ブ、エースケ、トク、カリコー、ウシちゃん、コマツちゃん、ポツちゃん、ゴンボ、キョウイクチョコゴ、デンキ、アクマ、シヨウフダヤ、ダッコウ、ゾ1、チャンドラボース、……

集計していくと、ニック・ネームだけ記憶している者が、相当な人数いた。卒業して58年が過ぎた。教え子我々の脳裏に去来する青春の映像には、何時も、薫陶を受けた恩師の影が映る。ニックネームは、ヤンチャな時代への郷愁をかきたてる。

当時、教員の人事権は校長にあった。という話はほんとうだろうか。黒川、筒井の両先生などは、いまの県教委のもとでは、こうも長く高く広く伊賀地方に学績を遺されることはなかったであろう。私達はいま、あらためて、上野中学校に学び得た幸運と誇りを思うのである。今年、お城の桜は、ようやく三分咲きであった。(松原英吉)

海外からの2通の手紙



Italy

イタリアより 麻生弥壽子 (旧姓 若林 阿女35回)

5年まえからイタリアに移住しています。1999年ピルの11階より落下して、九死に一生を得ました。手も足もボロボロになり命が助かったのも不思議なくらいでした、とても一人では暮らせませんので、妹(若林啓子)がイタリアに移住するのに一緒に付いてきました。

リハビリの結果、今では足は殆ど不自由無く歩けるようになり、左手だけは使えませんが普通の生活は出来るようになりました。5年間の闘病のとき、阿女同級生の、阪本寿美子様の「芭蕉伊賀」(俳句の同人雑誌 主幹藤井充子先生)を紹介していただいて、動けない身体で無聊をかこっている時心の支えとして今日となりました。

お便りしたのは、先日、妹のお弟子さんと阪本寿美子様親子が、私の家を中心に(この近くは、世界遺産がいっぱいある……)名所廻りをして、フィレンツェ・ローマと10日間一緒に旅をして最後に、ローマの教会のコンサートホールで音楽会をしました。同級生の阪本様(共に76歳)と妹とトリオで歌い、好評でした。

こんな年になっても、やれば出来る……と言う事を若い人にも知っていただきたいとお便りを差し上げます。

今年5月15日「芭蕉伊賀」出版100号記念があるそうです。何としても出席したく思っており、その時かっの同級生にもお会いしたいものと希望いたします。

私の住所はピサの斜塔で有名な「ピサ」「フィレンツェ」の近くです。リボルノ市と言って、海軍の軍港があります。

妹の娘は、イタリア国立バレエ団のバレリーナで活躍しています。妹(若林啓子)は、東京芸術大学音楽学部声楽科を卒業し、ずっと音楽の教師をしながら行く行くは娘の住むイタリアに移住したくて、30余年合気道を極め、今では総合武道の「道主」として、イタリアの海軍の軍人に教えています。



歌 阪本寿美子(阿女35回) 麻生弥壽子 若林 啓子(19年入学) ピアノ 加藤玲子(阿女37回)

2005年10月2日



India

インドより ナンディ串子 (旧姓 藤本 高13回)

同窓の皆様、明けましておめでとうございます。

今日は、正に2006年1月1日です。濱川勝彦先生(本当は名誉教授)に、携帯電話で新年のお祝詞を申しあげた後このお便りをしております。神様には、時々私達は苦業を強いられますが、時に時々ならいをしてくれる事もあるようです。この遠いニューデリーで、44年ぶり、高校時代の先生にお会いできたのです。先生がこちらに客員教授でお見えになり、そのニュースを耳にした私は、長く封印してあった高校時代の生活が、思い出され、懐かしさを抑えきれず、お電話しました。これ又伊賀風関西弁の日本語で、約半世紀も通したお声とは思えない程でした。で、我家にお招きしておめにかかる事にしました。当日12月24日の昼食です。日本食を考えてみたものの、味や作り方も忘れてしまい自信なく、結局大きく西アジアと決定。アフガンラザニア(カレーの一種)カラチハルワ(パキスタンのお菓子)中国キャベツ(白菜の事)の煮物南インド米シッキム茶等々先生の胃を心配せざるにはいられませんでした。顔面笑みを絶やさず、時には大笑いをと、神様は、笑いに終り、来る年も笑いのある生活をとり計らってくれた様です。昼食会には、長くこちらで活躍している私の仲間も一緒にもらいました。半分以上忘れてしまった日本語に苦勞しながらも、先生と本当に楽しいおしゃべりが続きました。それにしても先生のお話は実に愉快で、面白く作家の裏話や現代文学のエピソード等時間を止めてずーっと聞いていたかったです。日本の事情にうとくなった私達の質問にも、先生は面白く解説してくれましたが、これも小説の一部になりそうでした。ところでデリーの家は夏向きの為この時期寒く、ヒーターやショールがなくは底冷えに大変です。この日の夕暮れもそんな日でした。又の機会をお約束して、先生を大学の行舎までお送りしました。2005年の印象深い思い出も神様の粋な計りだったのでしよう。



濱川先生(右端)をお迎えして。筆者左端。

上野高等学校同窓会東京支部 新卒業生会員の 歓迎懇親会に参加して

17年度3年担任として参加させていただきました。初めてこの会に参加させていただくまでは、上高同窓会に地方支部があることすら知らなかったのですが、会場で昨年度・一昨年度と学年担当した卒業生の面々と再会して、本当に懐かしい思いをさせてもらい、感慨深かったです。

私は、本校卒業後地元で大学で学び、地元で高校で教職に就きましたので、「四方を囲める山々を越えて溢れて外に出」たことにはとてもなりません。関東方面で各界で活躍されている諸先輩の方々、大学で学ばれている後輩の方々といろいろお話しして、上野高校は全国区だなあと、今更ながら痛感した次第です。そして、故郷を遠く離れて学びあるいは働く卒業生に、このような盛大な歓迎会を催すことで仲間存在を感じ、不安感が少しでもやわらぐような配慮をしていただける上高同窓会は、改めて素晴らしいなと思いました。



久しぶりに会った卒業生たちはみな元気そうで、いきいきして見えました。見違えるように立派になって、眩しくさえ見えましたが、これからの時代を安心して任せられる、頼もしさを感じました。今後のさらなる活躍を期待します。

最後になりましたが、このような盛大かつ有意義な会を企画・運営していただいた同窓会役員の方々に、お招き頂いたことをあわせ厚く御礼申し上げます。(上野高校教諭 國井圭己 高30回)

上野高校同窓会考

我等が母校、三重県立上野高校が前身の上野中学以来創立107周年目に入り、卒業生の数は約4万2千名に達し、うち物故者は7千7百余名、不明者は約6千名となっています。旧上野市の人口が約6万人、市町村合併後の伊賀市が10万人であることを考えると、明らかに人口流出、頭脳流出であると言えそうです。山口警子作詞の校歌の中に、「四方を囲める山々を越えて溢れて外に出」と、狭い伊賀から出て、広く世界で活躍する上高健思であれと徹を發する一節があることから、我が同窓生諸兄姉はその教えを実践しているとも言えます。

数多くの同窓生が広く日本社会、さらには世界各地で活躍する様子を聞くにつけ、なにかしら嬉しい気持ちになるのはごく自然なことでしょう。最近では、芸能界の方で俳優の椎名結平君(高34回)や歌手の平井堅君(高41回)、文壇で芥川賞に連続ノミネートされた伊藤たかみ君(高41回)らがその才能をいかんなく発揮され、その活躍ぶりに私たち同窓生としてワクワクしながら応援エールを送っているところですよ。

この秋に同窓会名簿が発刊される運びとなり、事務局および名簿編集委員会と卒業生が数多く勤務する地元印刷業者の方々により、着々と発刊準備が進められています。全国的な市町村合併に伴い、より正確な情報を掲載すべく、調査をくり返し行なっていますが、今回の会報「白亜」にも最終調査カードが同封されていますので、ご協力の程お願いします。とある大先輩たちの同窓会の中で、「最近、個人情報という言葉にあまりにも過敏になりすぎている。上高同窓会は住所・氏名・職業ぐらい何も隠すことはない、正々堂々と情報開示するのが上高魂だ。」と名簿発刊への激励があったと聞き及びましたが、なるほど、もっともな意見と感心しながらも、より慎重な編集を希望するところです。同窓会費を徴収するようになって6年になりますが、毎年約3千名の方が払込んで下さっています。角度を変えて考えしてみますと、たった一朝の厚志と、毎年の卒業生の入会費によって同窓会が支えられていることに疑問符を付けざるを得ないところですよ。同窓会って一体なんやろ? 事業目的は? 存在意義は? こんな問いかけに明確な解答を出してくれる者はいません。ただ単なるノスタルジーを味わうだけの同窓会ではもの足りない気がするという声が開いてくるのも事実です。もっと深い連携があってもいいのではないのでしょうか。例えば、大学進学や就職先を探す時、同窓生の先輩たちが動いている大学や、経営している企業には優先・優遇が受けられたり、ビジネス面で同窓生の会社どうしのコラボレーションがあったり、また俳句や絵画、音楽などの趣味のネットワークが構築されたり、さらに極論するならば、息子の嫁、娘の婿探しや結婚相手募集ができたりますと大変喜ばしいことではないでしょうか。同じ土壌で育まれたDNAを受け継ぐ同窓会ネットワークが力強く展開されれば言うことありません。そして、年に一度の総会も同窓会フェスティバルに発展させ、コンサートありフリーマーケットありの三万人が参加する祭典にしたいものです。 永徹意(高19回)

2005年度寄贈本

| タイトル | 著者 | 出版者 | 寄贈者 |
|-------------------------------|--------------------|-----------|-------|
| 世界遺産111 | 平山郁夫 総監修 毎日新聞社編 | 毎日新聞社 | 星 周輔 |
| 少女の見た太平洋戦争 昭和15年から19年の少女日記 | 川端富美子著 | 新風舎 | 川端富美子 |
| 辛口あま酒 | 北泉 優子著 | 伊賀市文化都市協会 | 北泉 優子 |
| 運賃額/句集/平成俳人叢書 第4期第7巻 | 森中加代子著 | 文学の森 | 森中加代子 |